

幻のオニギリ

杉本 順 一

今、こうしてペンを持っても何を書いていいのかサッパリわからない、と言うよりも別に書きたい程の事も実はないのである。一〇年前を振り返って思い出すままに何かを書いていこうと思う。

六〇年は私は浪人生活の真最中、安保の大きな波はチラッと横目で見てすごした感じである。そして六一年、悪名高い新研に入る。つまり同志社に入ったというより、新研に入ったという方が私には当てはまっている。

新研は怖いところで、先輩は安保のあとの生き残りが多く、入会してすぐ、マルクス・レーニンが頭の上にチラチラとしていたのである。そんな中で、自治会室に足を踏み入れかけた、美人が幾人かいたが皆んな誰かの何とかであるというのでヤメタ。マルクスは自治会室にだけあるのではなかったから、自分で少し勉強もした。しかし、本も大いに面白かったが、女の方にもミリオクがあつたので、S先輩に誘われてFIWCに行くことになった。これが泥沼であつた〇〇さんやXさんに惚れては、フラれた。そんな中で在日朝鮮人やスラムや頼の問題が出てきたのであ

る。何とかそれ等の問題を、あくまでも自分自身の問題としてとらえようと、一生懸命であつた。しかし、生活の実感はどこかで自分と問題となるべき対象を引き離してしまふ何かがあつた。自分が頭の中で作りあげていく世界は、どうしても自分流の、現実とは別のものとしてしか出来上つて来なかつた。当り前のことなのだが、それが自分にはどうしてもやり切れなかつたのである。キャンプ活動の中で得た色々のことは、やっぱり自分にしか分らないものでしかないと思うのだが、何とかそれを他の者と共有しようと頑張つてみたのである。

自分の話す言葉や書くことだけで、自分の思うことをすべて他の者に理解してもらひたかつたから、大いにしゃべり、書きたいと思つてもいたやうである。

交流の家の運動がまだ始まる前、京都に下宿していたキャンパ―達が、毎日の様に誰かの下宿に集つて、日常生活の大半を共にすごしながら、何か、自分達の心のやすらぎとなるような所、そこにいけば誰かに会え？ まずしくてもいい、何かオニギリでもたべながら人生のアカをおとせる所が欲しいとよく話してゐたものである。

そんなことを話しあつていた連中のほとんどが結婚しているのが現実である。

生活を中心にした考え方は、理想を第二にせざるを得ないものであるが、生活に埋没していくのは、男にとって悲劇の始まりでも

あるのだ。テレビのコマーシャルには、もってこいの良きババ振りのキャンパーのなれの果て、資本主義は男も結婚すれば、去勢してしまふのである。オニギリはやっぱり女房の手づくりで子供の顔を見てたべるのが一番おいしいと感じている人が多いようだ。我が家は平和だな、である。でも欲しかったのは、オニギリではなく、アカをおとす所だったのだから……。

しかし、私は女房のオニギリの他に、もう一つ、幻のオニギリをみつけたのだ。よくよく私はおめでたいのである。バンドで点をとるのも人生だし、一発ホームランをねらうのも人生、でも空振りの三振には不細工でも、一生懸命にやったという自己満足が一番大きいかも知れないと思うのである。

(一九七十年一月二十日)

アメリカ生活雑感

長 沢 俊 夫

その1

私の務めている研究所は国立であり、人事問題ではまずその冒頭に“人種・性別・信条等では一切区別はしない”と書いてあり、内規でもって一定の割合で黒人を採用することになっている。それ故全体二千人の一割五分にあたる三百人は黒人である。しかしその種の多くは掃除夫、運転手、秘書等で千五百人の研究職の内には、数%しかいない。それでも十数人が単位の一つのセクションには一人か二人いる。給料も何も差はなく少なくとも九時から五時までの間は、殆んど白人に混じって議論し、実験している。昼のカフテリアでも白黒混ってテーブルを囲んでいるのを多くみうける。しかし一度午後五時を過ぎると全く断絶してしまふ。日本のように仕事の後、共に飲みに行く習慣のないこちらは、家にお互いを呼んで食事することが似合っていない。私自身も白人の家には度々呼ばれるが、そこに集まるのはすべて白人だし、黒人の家には呼ばれたことはない。白黒が混じる私的なパーティは日本人がインド人が主催した時だけである。この社会ではまだまだ白人と黒人は別の世界に住んでいる。

その2

街中のガソリンスタンドやデパートなどでよく“ハイ、コンニチワ”と声をかけられて驚くことが多い。聞いてみると、殆んどは沖縄か立川に居たことがあるという。金持国であるこの国では学会や大企業で会う連中の殆んどは度々外国へ行き、日本に行った経験のある連中は少ない。しかし街中で声をかけてくる連中は例外なく軍隊の仕事で行った連中で、よく話しをしてみると、韓国に行った連中も非常に多い。ベトナムでは、一時六十万人近いアメリカ人が居て、一定の期間で交替するから、延にすると数百万人のアメリカ人が一・二年ベトナムで住んだことになる。地球を半周する遠いところへ、これ程の人間を動かすとは軍隊は正に現代の怪物である。その数百万人は、アメリカ社会の下層階級が殆んどで国へ帰ればアメリカ社会のあらゆる末端部門で働く連中である。それからベトナムでは疑心暗思になり、いつ殺されるかも知れない恐怖におびえつつ、一心にカレンダーを一日一日つぶして帰国の日をまちわびている。時にはソンミ村の如き大ぎゃく殺があつても、その経験ある連中は“あの状態ではそんなことも起り得る可能性は充分ある”とうそぶき、中には“ベトナムの本当の解決は北も南も国中の人間が全部死んだ時だ”と言う奴さへ出てくる。すべてのベトナム人、女、子供すら、をこんな気持ちで理解している数百万の下層階級のアメリカ人がこの社会にもどって住むことを考えれば、例え一年以内に事実上の終止があつても、

この国の中での傷あとは、深く残っているやしないだろう。その意味でも悔を百年に残す失敗をやっている。

その3

昼食の食堂で偶々、二人のアメリカ人、日本人、中国人、フランス人、イタリア人、トルコ人、イギリス人と外国人が多く集まった。誰かがベトナムでの北爆についてアメリカを非難したところ、アメリカ人は昭和十六年の日本のハワイの真珠湾攻撃の方がひどいと攻撃をこちらにかけてきた。日本としては、広島、長崎の原爆投下について、戦争史上、最高の悪と述べたところ、アメリカ人は広島、長崎なんて当然で、早く戦争を終らせる為に日本人民を含めて、世界の為に善であったとし、非人間的行為として、これら三つを減点法で言うならば、真珠湾が最悪で十点、ベトナムは五点、広島、長崎は〇点と評価した。そこで集まった外国人に評価してもらおうと、すべての外国人（私とアメリカ人を除いて）は、まず真珠湾など問題にならないとして零点を与え、広島、長崎は十点、ベトナムは八点を与えた。アメリカ人は全く想像も出さない評価にあきれてしまい、特にショックをうけたのは、殆んどヨーロッパ人であったし、このアメリカにきて住んでいる以上、相当、親米的と考えて良いこれらの連中の評価であるだけ、その驚きは強烈であった。その後、そのアメリカ人は会う度にベトナムのアメリカ政策について真面目に評価を求めてくるようになった。

その4

八月十五日、今日は何の日か知っているか」とアメリカ人に聞いても殆んど何も答えない。で「日本の負けた日」と言うところへ、「——。」と言って終りだが、あるアメリカ人「Oh NO」と大きく否定した。それは「八月十四日だ」と。冗談じゃない、日本人がこの日を間違える筈はないと大声で主張しても、彼は頑として正しいとくり返す。ケンケンガクガクの後、やっと判ったのは、日本で八月十五日のボツダム宣言受諾は、時差の関係でアメリカでは八月十四日であったのだ。即ち、同じ事柄の記念日なのに両国で一日ずれている。その時、韓国人が「いやそれは、八月十六日だ」と言ったので又もや紛れてきた。日本と韓国では時差はないし、良くきいてみると、日本に併合されていた朝鮮が独立宣言をしたのは八月十六日で、朝鮮人にとっては、第二次世界大戦が終り、日本が負けて朝鮮が独立した記念日は八月十六日なのだ。処かわれば品変ると言うが、歴史も違うものだ。そう言えば、アポロによつて月に始めて人間が降りたのも、テレビで全く同時に日米でみたにも拘らず、日本は正午であるのに、こちらは、前日の夜で、その日を記念日とするとやはり一日ずれることになる。ややこしいものだ。

私の“らい”

久米 栄 子

まぶたをバチバチと開いたり閉じたり……まっ暗なのか……それとも目をつぶったままなのか……分らない……開けたと思っても閉じてみても……目の前の黒さには変わりがない……手をそつと動かしてみても……足をそつと前へ……少しづつ……ジリジリと前の方へ……あつた、壁だ……ずつとどこかへ続いている……まっ暗……急に足が泳ぐ……踏みだした足の下に手ごたえがない……暗黒の空間……どこまでも……いつのまにか壁もない……ずつと……まっくらやみ

としさんが私に言う

「生きる事はすばらしい事です、何もなくともただ生きているだけですばらしい事です」

はずかしい

としさんがまた言う

「目も見えない、指も動かない、皮フの感覚もない、それでもまだ私は生きていたいのだものね」

死ぬ程はずかしい

としさんはつづける

「春が来ると花を、夏には海を、秋はおいしい食べ物までちゃんと待っているんですからね、自分の力で立ち上ってきたということはとてもうれしいことなんです、そこに何もなくてもね」

この長い間自分のらいと闘い続けてきたお婆さんは明るい文章にも、持ち前の楽天性にもかかわらず、私の中に重たく重たく、否応なしに重苦しい「らい」を押しつけてくる、私の中に「私のらい」と意識させようとする。私はらいさんをそう嫌いじゃない、別にイライラもしない、ただ最初ちょっとこわがっただけだ、今は別に何ということはない、ほんのときどきウンザリすることがあるくらいのものだ。その私の優しさを、としさんは下の方からジワジワと掘りくり返してしまおうとする。

まっ黒でまっ暗で、開いても閉じても目の前の色には全く変化がない。

健康の優位性によって裏打ちされた私の優しさはとしさんが喜びを感じる程、としさんが人生を替える程、湿っぽく若々しくなってくる。

そしてついにある日

私は私のとしさんにいう

ナンデエ ナンデエ 楽しいんならそれでいいじゃんかさ、らいだって何だって同じじゃんかさ、こっちだってそり楽しいことばっかじゃないもんさ、にたようなもんじゃんさ、そりゃ全然分っちゃいないけど、もうしんどくなっちゃった。

考えるのが

「期待される集団像」もナーンセンス、つぶれるもんならつぶしてしまえ、こわれるもんならこわしてしまえ、後生大事にそんなもんかかえてると、いまにペランダがおっこちちゃうぞー

としさんは話しつつける

「そりゃもうとてもうれしいことですよ、学生さん達が私達のために立派な家を建ててくださったり……」

でもそこはやっぱり学生さんの家ですよ、学生さんのための家ですよ、らいの家じゃありません、少くともらい者の家じゃありませんよ」

そんなこと当り前だとみんな言うだろうと思うし、私もそう思う、藤本としさんはこれを聞いたら驚いてしまいかもしれないが、いつのまにか「私のらい」の象徴みたいになっっている私のとしさんと話していると、私はいつもらいからは出発できないと思ってしまう、そこにはいつもイキドマリを予想させる。私は抽象的な思

考のできない女のためには苦しんだ事があっても、らいの為に苦しんだ事は一度もない。

飯炊きの思想からはいっていかう、いつかそれが私のらいとぶつかる時に、それが乗りこえられる筈だと考えよう。そして今はいから逃げ出そう、確かにやっぱり、本当にどうしようもなく、私は関東の女なんだなーと思う。